

大ゴッホ展 開幕まで1年

生涯を追う

感情や魂を絵筆に込め、深い芸術性を発揮したポスト印象派の画家フィンセント・ファン・ゴッホ（1853～1890年）。福島市の県立美術館で2026（令和8）年2月から5月、2027年6月から9月の2期にわたり開催される「大ゴッホ展」。開幕まであと1年に迫り、改めて魅力を紹介する。（監修・県立美術館）

夢、希望、失意、苦悩…

作風、心の内面と呼応

37歳の若さで亡くなったファン・ゴッホ。わずか10年の画業だが、その作風は夢や希望、失意や苦悩などの内面と呼応するかのように変化した。オランダ、フランス・パリ、アルル、サン＝レミから終焉の地オーヴェール＝シュル＝ヌオーワーズと、移り住んだ拠点の地をキーワードに彼の生涯を追った。

① 画家を志すまで

ファン・ゴッホは1853年、オランダのフロート・ズンデルトに、牧師の息子として生まれた。69年、美術商グービル商会ハーグ支店に就職するが、76年に解雇され、牧師を志す。79年に炭坑町ポリナージュで伝道活動を始めると、80年に聖職者の道を断念。画家になることを決意し、オランダに帰郷した。

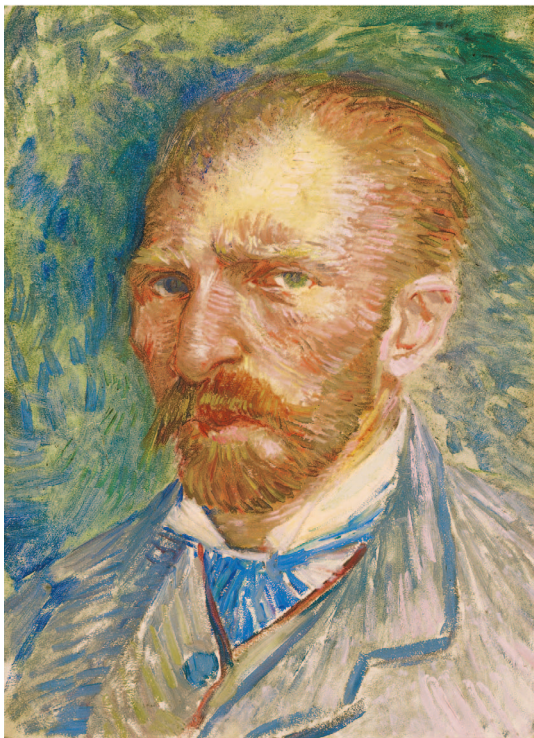
©Collection Kröller—Müller Museum, Otterlo, the Netherlands. Photography by Rik Klein Gotink



③ フランス・パリ時代 1886年3月～1888年2月

テオの協力を得て、ロートレックやベルナルと知り合い、印象派から台頭し始めたシニャックら新印象派の作品に触れる。絵の具をパレット上で混ぜず、原色に近い色を細かいタッチで配して得られる明るい色彩世界はファン・ゴッホの画風に影響を与えた。

また、日本の浮世絵にも関心を寄せる。歌川広重の「亀戸梅屋舗（かめいどうめやしき）」や溪斎英泉の「花魁」などを模写。細かいタッチを並べる様式から、平坦で鮮やかな色面と太い輪郭線からなる独自の様式へ。多くの画家や最新の絵画、浮世絵との出会いは彼の作品を劇的に変化させていった。特徴：印象派の影響を受けて色彩が開花。日本への憧れ。



「自画像」

1887年 油彩、厚紙 32.4×24cm
クレラー＝ミュラー美術館

「夜のカフェテラス（フォルム広場）」

1888年 油彩、カンヴァス 80.7×65.3cm
クレラー＝ミュラー美術館

第1期



② オランダ時代

1880年8月～1886年2月

ほとんど独学でデッサンを描き始めた。27歳からの出発だった。「じゃがいもを食べる人々」（1885年）

など、農民や労働者を頻繁に描いた。数限りない素描写生を重ねた後、美術界の中心、パリへの憧れか

ら、86年に画廊に勤めていた弟テオドルス（通称テオ）を頼り、パリに渡った。特徴：暗い色調。大胆な筆致の萌芽はこの頃から見られる。

「白い帽子をかぶった女の頭部」

1884～1885年 油彩、カンヴァス 44×36cm
クレラー＝ミュラー美術館



「森のはずれ」

1883年 油彩、カンヴァス 33.8×48.5cm
クレラー＝ミュラー美術館

④ フランス・アルル時代

1888年2月～1889年5月

1888年、日本の風景に似た南フランス・アルルへ移住。ファン・ゴッホはこの地で、鮮やかな色彩と力強い筆致、補色の強烈な対比を取り入れ、「アルルの跳ね橋（ラングロワ橋）」「夜のカフェテラス（フォルム広場）」（いずれも1888年）などの代表作を生み出した。生

涯で最も創作意欲と希望に満ちた時代だった。共同アトリエ「黄色い家」でゴーギャンと生活を共にするが、やがて関係が悪化。ファン・ゴッホが自ら耳の一部を切り落とす事件を引き起こし、短い共同生活が終わる。特徴：補色を併置することで色彩のコントラストが際立つ。ゴーギャンとの共同生活。



「夕暮時の刈り込まれた柳」

1888年 油彩、厚紙に貼ったカンヴァス 31.6×34.3cm
クレラー＝ミュラー美術館

第2期

1889年5月～1890年7月

アルルで精神病の大きな発作を起こし、1889年、サン＝レミの精神病院に入院。90年、パリ郊外のオーヴェール＝シュル＝ヌオーワーズを次の静養地を選んで移住した。療養中も「夜のプロヴァンスの田舎道」（1890年）などを手がけるが、アルル時代の原色に近い平坦な色面表現から、力強く荒々しいタッチ、うねるような筆触に変わっていった。同年7月、拳銃自殺を図ったとみられる傷が元で、自身の画業を支えてきた弟テオに看取られて死去した。特徴：入院しながら制作を続ける。のびやかな筆致。



「夜のプロヴァンスの田舎道」

（パネルの一部より）、1890年

⑤ フランス・サン＝レミ、オーヴェール時代



「アルルの跳ね橋（ラングロワ橋）」

1888年 油彩、カンヴァス 54×64cm
クレラー＝ミュラー美術館

クレラー＝ミュラー美術館所蔵 第1期74点展示

「大ゴッホ展」はファン・ゴッホのコレクションで世界的に有名なオランダのクレラー＝ミュラー美術館の所蔵品を

展示する。第1期（2026年2月21日～5月10日）は「夜のカフェテラス（フォルム広場）」を中心にファン・ゴッホの画業

の前半期の作品、第2期（2027年6月19日～9月26日）は「アルルの跳ね橋（ラングロワ橋）」を軸に晩年の作品を飾る。第1期74点を含む第2期合わせて約140点を展示する。

印象派の巨匠モネやルノワールの作品も含まれる。実行委員会（県、県教委、福島民報社、福島医大、NHK福島放送局、福島テレビ、福島中央テレビ、福島放送、

テレビユー福島、ラジオ福島、ふくしまFM、福島市、県立美術館）の主催。東日本大震災・東京電力福島第1原発事故から15年、県政150年の節目に合わせて企画した。

ゴッホ年表

- 1853年3月30日（0歳）フロート・ズンデルトに生まれる。
- 1869年（16歳）美術商グービル商会のハーグ支店で働き始める。
- 1873～1876年（20歳～23歳）同会のプリュセル、ロンドン、パリ支店に勤務し、退職。
- 1877年（24歳）牧師を目指す。
- 1878年（25歳）ベルギーの伝道養成学校へ通い、炭坑町ポリナージュで伝道活動始める。
- 1880年（27歳）画家になることを決意。
- 1881～1883年（28～30歳）オランダ・ハーグで、画家アントン・マウフェの教えを受ける。
- 1886年（33歳）弟テオを頼り、フランスのパリに移る。
- 1888年（35歳）南フランスのアルルに移る。「黄色い家」を借り、ゴーギャンとの共同生活が始まるが、ゴーギャンと口論の末、自ら左耳を切り落とす事件を起こす。
- 1889年（36歳）入院を繰り返した後、サン＝レミの療養院に移る。
- 1890年（37歳）サン＝レミからパリ近郊のオーヴェール＝シュル＝ヌオーワーズに移る。7月、オーヴェールの麦畑から、胸部をピストルで撃った状態で下宿先に戻る（自ら撃ったとされる）。テオに看取られ死去。